



vol.39

文責：荒木 秀夫
(徳島大学大学院教授)

「分化の分化能力」

前回、スポーツの習熟に伴って一定の能力を獲得すると、クローズドスキルとオープンスキルは双方の間で揺らぐ…、このことを含めて「型」を揺らす」重要性に触れました。端的に言えば「コーディネーション能力における「分化の分化能力」ということでした。

復習になりますが、「分化」そのものの意味は、正確に反応するということです。しかし、正確に反応するという、まさに「正確」そのものが一つではなく、いくつにも分かれます。ただ、その場で適切に正確な反応を選ぶという意味だけではなく、精度を落とすことも含まれます。これらのことが、揺らぐ、という意味に含まれますが、プロ野球の投手が相手側のスクイズの寸前にボールのコースを外すといったことがありますよね。野球ファンであれば多くの人が知っている江夏投手の逸話です。まさにボールのリリース直前でした。これが「分化の分化能力」といえます。

私の研究室で、当時学生の学生が卒業研究でこんな実験をしました。ハンドボールでラテラルパスという動作を解析

問合せ先／スポーツ推進課 プロ
ジェクトK・スポーツ推進係
☎ 57・4850

したのですが、ハンドボール選手と未経験者の2グループに分けて、筋の使い方と動作の動きを調べたわけです。結果は、片方のグループが無駄な筋を使うことなく重心もパス方向へ移動するという効率の良い動作でしたが、もう一方は無駄な筋を使い、しかも重心はパスとは反対方向に移動するというものでした。みなさんはどちらがハンドボールの選手だと思えますか。実は、無駄な動きをしていたグループがハンドボールの選手達だったのです。

理想的な効率の良い投げ方は途中で変更していくのに対して、一見未熟な投げ方は突然変更できます。シュートする選手ヘラストパスとしてラテラルパスをしようとした…、すると相手選手が立ち上がりインターセプトされそうだし、その分、前が空いた…、ならば自分がシュートをしよう…というのが「動作の変更」です。

実際には、このような場合でも、さらに複雑な段階があるのですが、いずれにしても「分化の分化能力」は目立たない能力です。おそらくこれを見極める指導者、選手は少ないことでしょう。しかし、このデリケートな能力はどのようにして達成されるのでしょうか。土台となるのが感覚能力との関係です。次回、もう一度、感覚との関係から考えてみましょう。



乳児シリーズ vol.10

赤ちゃんの“環境”



人間はさまざまな生活環境に適応しながら生活していますが、新しい家、新しい土地に住めば戸惑うことがあっても次第に慣れていきます。赤ちゃんにとってはどうでしょうか。赤ちゃんが少しずつ意識を持ち、自我に芽生えて環境を理解することになれば、環境適応の始めの一歩となるわけです。引っ越しなどで突然違った生活環境へ移ったらどうか…。それが、意外と大人ほど戸惑うことなくすぐに慣れるという気がしませんか。このことは多くの人が感じていることでしょう。むしろ高齢者の方が戸惑うし、なかなか住み慣れた土地から離れることには抵抗感を示します。

そこで、赤ちゃんにとって生活環境への慣れということをし少し考えてみましょう。前号でのハイハイの時の「目標」の話を思い出してください。そして赤ちゃんの空間奥行き感は広くないということも…。つまり、赤ちゃんにとっての生活環境は狭く、どちらかという近いところにある「もの」や「こと」が強い環境の要素として横たわっています。目の前にある皿、目の前でゆらゆらと揺らされる「ガラガラ」

に関心をもちますし、何らかの反応を示します。大人、特に高齢者が住み慣れた土地から離れたくないという思いとは違って、赤ちゃんにとっては見慣れた…、もっと正確に言えば「触り慣れた」ものごとから離れたくないという環境の要素となります。

家族で出かける時、いつものクマのぬいぐるみを持ち歩くとか、いつもの枕でないと寝ない、いつものタオルでないと拭いて欲しくない…といったことをよく見受けまよね。赤ちゃん（いや、もう幼児ともいえますが）にとって、この「身近な環境」が生活環境であって、このことは重要な意味を持っています。「目標」がハイハイを促すように、その身近にある「ものごと」が、触る、動かす、いじるといった能動的な行動を引き起こすこととなります。能動的な行動が脳の発達を促すのであって、ハイハイからヨチヨチ歩きへと変化する中での目標に向かって移動しようとする重要なモチベーションとなるわけです。それは、脳と心の発達を促す、まさに哺乳動物が持つ本能ともいえるものです。